The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞針貝綾著『ユーゲントシュティルからドイツ工作連盟へ ： 世紀転換期ドイツの美術工芸工房と教育』
Author(s)	天貝, 義教
Citation	デザイン理論. 2018, 72, p. 126-127
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70577
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評　針貝綾著『ユーゲントシュティルからドイツ工作連盟へ ── 世紀転換期ドイツの美術工芸工房と教育』

九州大学出版会　2017　404 頁

天貝義教　秋田公立美術大学

本書は，その「あとがき」によれば，「ドイツ近代美術工芸工房の研究 ── 世紀転換期のミュンヘン手工芸連合工房とドイツ工房を中心に ──」と題された学位請求論文に加筆し，修正した専門書である。５つの章からなる本書の内容は，著者自身によって「結章」に要約されている。

それによれば，本書の全体を通じて，ユーゲントシュティルの全盛時代にドイツにおいて設立された多数の工房（Werkstatt）のなかで，ミュンヘン手工芸連合工房とドレスデン手工芸工房（後にドイツ手工芸工房を経てドイツ工房）に注目し，その沿革，組織，展覧会活動，作品について整理し，これら二つの工房の美術工芸運動における位置づけを検討するとともに，工房にかかわった図案家たちの教育施設での教育活動，そしてドイツ工作連盟（Deutsche Werkbund）との関係が検討されている。第１章では，ミュンヘン手工芸連合工房の設立の経緯から規格家具の生産が始まるまでの約10年間の活動が取りあげられており，ドイツ工房は第２章で取りあげられている。第３章では，当時の工房の重要な機能のひとつとされる教育的側面に光が当てられ，シュトゥットガルト教育実験工房，ニュルンベルクのバイエルン産業博物館附属マイスター・コース，応用自由美術教育実験アトリエ（通称デプシツ＝シューレ），ドイツ手工芸工房の附属工芸専門学校などについて，そのカリキュラムをふくむ教育内容が分析されている。

こうした内容は，表題から予想されるような，1900年前後のドイツ帝国内において工房と名乗った組織全般について，これら組織とドイツ工作連盟の設立やドイツ帝国内の工芸学校ならびにその教育の改革との関係をふくめ，網羅的に捉え，その全体像を明らかにしようとしたものではない。むしろ，当時の万国博覧会の展示や，ドイツ工作連盟の設立にいたる動向のなかで中核的な組織であったミュンヘン手工芸連合工房とドイツ工房に焦点をあわせ，この二つの工房に関係した多数の共同制作者たちが，バウハウス創立以前のドイツ帝国内の工芸学校の教育やそのカリキュラムの改革に実践的かつ理念的に携り，とりわけ工房教育を普及することに貢献したことを明らかにすることを目的としている。そのさい，本書では国内外における先行研究についても充分に取りあげられており，また巻末の図版・主要人物略歴・主要参考文献にくわえて，二つの工房と，ヴュルテンブルク王立美術工芸学校シュトゥッツガルト教育実験工房に関する資料も紹介されており，ドイツ語圏の工芸やデザインの歴史にとどまらず，その教育もふくめ，広くこれらの分野に関心をもつ読者にとって有意義な著作となっている。

しかしながら，本書も学位論文ならびにこの種の研究において避け難い制約のもとでまとめられたのではないかと想像される。すなわち外国語の翻訳の問題であり，研究対象そのものに内在する用語の混乱の問題である。こうした問題は，本書でも参照されている *Design in Germany 1870–1918*の著者のヘスケットや，*Before the Bauhaus* の著者マシュ

イカも指摘していることである。一例をあげれば，本書の表題にみられる「美術工芸工房」の「美術工芸」という表現である。併記されたドイツ語の表題から，Kunstgewerbe に対応していることが理解できるが，しかし，序章・第１節の冒頭にみられる「美術工芸運動」という表現が，ドイツ語にいう Kunstgewerbe の運動なのか，英語でいう Arts and Crafts の運動なのか，両者を重ね合わせているのか，判断に迷うところであろう。本書の扱う世紀転換期という時代からすれば，英国の Arts and Crafts の運動との関連で理解される動向に関するものと思われる。Kunstgewerbe の運動が，その教育を含め，ドイツ語圏で盛んになるのは，1860年代以降とみられ，世紀転換期には，Kunst und Kunstandwerk という表現が，Kunstgewerbe にかわって使われるようになっていたからである。

また，本書の主題のひとつである教育を取り扱った第３章には「美術工芸学校」という表現がみられるが，これは，ドイツ語でいう Kunstgewerbeschule のことであり，この名称を使った教育機関は，日本語では「工芸学校」と訳されることも多い。「美術工芸学校」や「工芸学校」という表現からすると，機械生産ではなく手工作に関わる教育が主となると思われがちであるが，Kunstgewerbe という分野では，手工作にとどまらず機械生産も積極的に肯定されていたことを忘れてはならない。

私の個人的見解からすれば，世紀転換期に設立された Kunstgewerbe に関する工房，そして，この分野に関する教育の改革や，その内容のユニークさに言及するさいには，英語を使うならば，arts and crafts の表現よりも，むしろ applied art という表現で理解したほうが，改革の意義がいっそう明確になると思われる。

とりわけ同章第３節で言及されている1906年の創立のワイマールの大公立美術工芸学校と1902年創立のミュンヘンの「応用美術と自由美術のための教育実験アトリエ」（Lehr- und Versuch-Ateliers für angewandte und freie Kunst）をバウハウスの先駆けとして評価しようとするとき，ドイツ語圏における最初の Kunstgewerbeschule が，半世紀近く前の1860年代の後半にウィーンに設置されたことを念頭に置くことが大事であろう。そこでは，日常的な生活用品に応用すべき建築（Baukunst），彫刻（Bildhauerei），素描と絵画（Zeichnen und Malen）に関する三つの専門教育（Fachschule）と，専門教育に進むための予備教育（Vorbereitungschule）がおこなわれていたのである。

こうした建築・彫刻・絵画などの，いわゆる美術と，Gewerbe や Industrie と呼ばれる産業や工業とを結びつける試みとして，1860年代に Kunstgewerbeschule の設立がはじまったこと，世紀転換期以前の Kunstgewerbe には，その様式として，厳格といえる歴史主義の様式がもとめられていたこと，さらに本書のテーマのひとつでもある工房教育がカリキュラムとして，1860年代の Kunstgewerbe の学校にはなかったことなどが，ユーゲントシュティルやセセッションという歴史主義にかわる新しい様式の登場とともに，世紀転換期に設立された工房とその教育上の意義を際立たせているといえるのである。

蛇足ではあるが，ワイマールからデッサウへ，グロピウスからハンネス・マイヤーへ，というバウハウスの変遷のなかで，バウハウスの工房が，実験室（Laboratorium）へ，さらには労働共同体（Werkgemeinschaft）へとその性格を変えていったこともまた世紀転換期のドイツに登場した工房と，その教育についての関心を高めてくれると思われる。